かなづかひ教科書

物集高見著

全

811.56
M897k
r(3)

077063-000-2

811.56-M897kr

かなづかひ教科書

物集　高見／著

M28

DAC-0247

帝國文科大學教授物集高見先生著

かなづかひ教科書 全

東京書肆 文學堂發行

国立国会
26.9.10
図書館
245094

かなづかひ教科書

例言

一 此書は、余が、東京大學、および東京師範學校等にて自ら教へたる、かなづかひの、書取なるが、此度、また華族女學校にも用ひらるゝことゝなりぬ。かくは、上水せーなり。

一 此書により、此式をもちふる時は、清音濁音音便の、三種のかなづかひは、大抵、十二時間、乃至、十五時間をもて、全く教へ得べし。

一 生徒の試驗には、余は、常に、種々の、漢字を與へて、傍訓を附しめ、或は、假字違ひの、歌文を與へて、其正誤を附しめさう。

811.56 M37k (3)

例言

一 此書ハ、余が、東京大學、および、東京師範學校等にて、自ら教へしこと、かなづかひの、書取なるゞ、此度、また、華族女學校にも用ひらるゝに、勸められ、よりて、かく、ハ、上木せしなり。

一 此書により、此式をもちふる時ハ、清音、濁音、音便の、三種のかなづかひハ、大抵、十二時間、乃至、十五時間をもて、全く教へ得べし。

一 生徒の試驗によハ、余ハ、常に、種々の、漢字を與へて、傍訓を附しめ、或ハ、假字違ひの、歌文を與へて、其正誤を附しめ、

一 書中、くらゐ。鳥芋ずら。條などの如く、一語にて、一の部にも、ゐの部にも、出すべき類ハ、最初の部にのみ出して、別々にハ出さず。

一 書中、（）をかけるこゝろぞハ、古言まことハ、古言のたぐひにて、今ハやうなきものなり。

一 書中、あらら周章を、出せるうくまきらは、其下に、あらたゞし惟遽を出せるハ、いかにも、無益のやうなれども、かゝる語ハ、假字も同樣なりといふを、知らしむるにきゝめてよき、便利ともなれむ、いぶかし。

明治十八年十二月

帝國圖書館藏

かなづかひ教科書

豐後　物集高見　著

帝國圖書館藏

ことゝすべての、ことゞも、

國語ハ、音をつゞる、ものにて、假字ハ、音をもとゝして、ゆくものなり。されど、其假字を、正さんとするに、先づ、其ものの音より、正さゞるべからず。さらに、本邦人ハ、昔より、其思想をいふに、漢語をもちゐ、國語をもちゐるに、漢字をもちひ来しうゑ、今ハ、象形文字の、目にみるに、馴れたるほどハ、記標文字の、耳に聞くまゝに、なりつゝ、すゞに、殆と、千餘年をへたりき。されば、今たちまち

ちゝ其馴れゝる、漢語をやめ、漢字をすて、其やうゝくなりゝる、國語と、假字との みゝ、することあゝそぢ。されど、先づ、其音の、あやまれるもあきて、其假字より、正さんとも、すたるべきそ、其國語の數をかぞへバ、少なくとも、五萬ばかりもあるべからんゝ、其國語の、假字どもを、ひとつづゝ覺ゆるハ、たゝやすからぬ、べき、事ゝもあらねど、別ゝ、覺えやすかるべき、一種の手段を、設けざるべからず。ゝゝゝ、先輩の、考へたる、一種の、法あり。其法、一つの、紛るべき假字を、取り出で、其一つハ、あげ、そ、一つハ、推し量る法なり。抑も、假字の、紛るといふハ、よく相似たる、音どもの、二つあるゝ、これ、其二つの、よく似たる音ゝ、つきて、其多きと少きとを較べ、まず、一つの、少き方をば、よく覺えて、きて、今、一つの、多き方のハ、非ずとおもはるる、假字なりとおぼゆる法なり。例へば、いの假字を、書くべきも、二百五十ゝ、あの假字を、書くべきハ、十七なれバ、あの、いより、少なきこと、十分の、一ゝも至らざる、割合なり。然る時ハ、其少なき、あの方のをば、おぼえおきて、其他のハ、おぼえおくべき、方のなれば、かからずい、の假字なりと、推しとかり知る、類の如し。

かなづかひの、ゝかゝ。

假字づかひをゝかゝバ、清音の假字、濁音の假字、音便の假字、字音の假字の、四種ゝゝからべし。其うち、字音の假字ハ、其數、少き

からねど、用ふべき節々ゝ、考がへて、馴れておぼゆるを、よしとすべし。なほ、字音の假字ハ、字音かなづかひ教科書を見るべし。さて、假字の綴るべきハ、清音の、阿行、也行、和行、波行と、濁音の、佐行、多行とさて、次の如し。

清音にて綴るべき、假字。但し、○をめぐらしたるハ、全く綴れぬ、假字なり。

阿行　あ　い　う　え　お

也行　や　○　ゆ　○　よ

和行　わ　ゐ　○　ゑ　を

波行　は　ひ　ふ　へ　ほ

但し、此うちにて、阿行、也行、和行ハ、ともに、喉音なれバ、其韵、やゝちかくて、綴れ易かれども、あ、や、わハ、ちがひなく、まゝ、よも、綴るべきこととなし。也行のゆハ、和行の字ハ、古より、阿行のいうと、區別を、立てざれバ、まゝ、綴るべきこととなし。波行ハ、詞の、上にありてハ、綴れずして、中と下とに、ある時、阿行、也行、和行のに、綴るべきことあり。

濁音にて綴るべき假字。但し、○をめぐらしたるハ、全くまぎれぬ、假字なり。

佐行　さ　じ　す　せ　ぞ

多行　た　ぢ　づ　で　ど

ぢ、づハ、ゆゑに、綴るべきハ、上にありて、如くなれど、其すくなき方、即ち

おぼえおくべき假字のうち、清音の、和行より次第にいふべし。

○清音の假字

わ この假字ハ、わた(綿)、わらふ(笑)、などの如く、語の上にある時ハ、まぎるゝことなく、あわ(泡)、あわつ(周章)、などの如く、中と、下とにある時ハ、は‖にまぎるゝこともあり。おもは‖あはれ‖とも、は としてハ書くべし。されバ、こゝには、中と、下とにありて、わと書くべき、かぎりを擧ぐ‖り。此ほかのハ、皆はと書くべしとこゝろえおくべし。

あわつ　周章、あわてさわぐ。字鏡(惶急阿和豆)あわたゞし、惶遽、假字おなじ。

いとけなし　稚、いとけなし、をさなし。此假字日本紀に、稚駿を、いとくとよめるによる。

いわし　鰯、魚の名。和名抄(鰯、伊和志)

うゑる　植、草木うゑる、などの、うゑ。風俗歌(宇和流)うゑ‖は(植)といふ語ハ、和行のゑなれバ、うゑ‖とも、いはるゝ‖如く、まづ、うゑ‖などのゑ‖ハ、詞の中にあるか、他の語の上に、かゝれる時ハ、ゐにある例なり。しへバ、すゑ(居)を、すわる‖といひ、こゑづかひ(声遣)を、こわづかひといひ、うへ‖づゝみ(上包)を、うはづゝみといふ、類の如し。

かわく　乾、さかわりけ、うす。字鏡(燥、可和久)かわらか、燥、かわく、こと、假字おなじ。

くわゐ　烏芋、草の名。和名抄(烏芋久和為)

さわぐ　騒、さわぎみだるゝ。万葉集(佐和久)さわがし、騒、假字おなじ。

さわやか　爽、さわやか、日本紀私記(左和也加)さわやぐ、爽、さわさわ、爽、まさやかなる。假字おなじ。

すわる　居坐、うごかずして、をる。すう(居)といふ詞の、すゑらき。すわるの下、見るべし。

ずはえ

たわむ

たわやか

たわら

ゆわう

よわし

條、木の枝の、すぐ〳〵のびたる、もの。此假字、古書には見えず、延喜式のも、たしかならねど、今ハ、本居翁の、ずはえ（末枝）なららんといへるによる。

撓、たわりをうけて、下にたわむく。字鏡（剖、多和牟）たわ、撓、たわゝ、撓々、たわゝ、撓々、たわむこと。萬葉集（多和多和）

嬋娟、たわやかとして、やはらかにみゆるさま。假字ハ、次の、たわやめに、なずらふべし。

たわやめ、美女、たわやかなる女。萬葉集（多和也女）

俵、米などをいるゝ、たわらげし。此假字古書にみえず。今ハ、高田與清の、松屋筆記の説による。

硫黄、火をもやすもの。和名抄（流黄由王）

弱、つよくなし。字鏡（脲、於毛與和志）かよわし。弱、よわし、よわる。弱ばよわくなる。假字なるべし。

あわ

しわ

ひわ

（みわ）

泡、沫、水のふくれたるもの。古事記（阿和）あわ 白塩、あわしほ。和名抄（白塩、阿和之保）あわしほ、沫雪、あわゆき。古事記（阿和由岐）みなわ、水泡、みのあわの納りて、みなわといへり。みなわ（水脈）（水上）のごとし。ハ、のあの、つゞまりたり。

皺、皮の、縮みたるもの。和名抄（皺、之和）しわむ、皺、しわむ。字鏡（䩺、於毛豆志和弥）

鶸、鳥の名。この假字、古書にみえず。されど、山家集に、此鳥の、歌ありて、常にかくかきならへり。文字も、鶸の字に似たれば、此假字なるべし。

酒瓮、酒をもるかめ。日本紀（瀰和）

次のハ、ほかの語と、結びあひたる語なれど、結びなきときて見れば、語義わかれて、其假字も、知らるめれども、語義を知らざれ

245094

る時ハ、書くことも、讀むことも、いとやすきなり。今ハ、ひとつの、語のやうにも、なりぬるが、あれこれ、いぶせし。

うらと　浦回、浦のめぐり。浦のほとり。すべて、物さまの、嶋回、嶋のめぐりなどいふ。嶋のほとり。

おほと　輞、車のそとがわの、大きなる、輪。大輪の、こまもち、ものい輪の

くると　轡、馬の口にはめる。和名抄（轡、久豆和）

廓、ひろくかこまれたる、ところ。此假字、古書にみえず。

ぐりて、くるくるとかこまれたるを、ぐるといふ。

むくろ　ハ、かばねならず、この假字なるべし。

諺、ことの、ものさ。

靈異記（去磯和左）

理、ことのすぢ。ことのわけ。萬葉集（許等和利）

ことわり

聲音、ことわり、くるぐるの如ハ、ことわりのとくらるよ、いとしかもとくらる、例なり。ことわりさまの、聲樣、ことわりことわり、聲絶ことわり。

ことば　聲高、ことばか、聲遠、ことばか、聲作、咳嗽、ことばづくり、ことばづき。字鏡（歌、已和豆久利）

ひびき、聲響、ことばひびき。ことばぶり、聲風、ことばぶり。

作業、すること。

のとき　野分、秋の名抄（暴風、乃和支）と、あれしとも、たゞ、暴風こと、ふく、暴風なり。秋の頃

ちとせ　腸、腹のとこと。和名抄、腸、波良和太

ちとせ　ここの假字ハ、ちとせの如く、一音の、語なる時、あるそ、あさ

らひ、ゐぐひ、たゐなどの如く、語の上に、ある時ハ、いにまぎれ、いと
もいさらひ、くもゐ、ふなゐ、まゐる、あゐ、あをゐ、などの如く、中と下と
としてハ、かくべし
に、ある時ハ、いと ひとに、まぎるゝ ことあり。まゐるとも、まひるとも、ふ
としてハ、されバ、ゐる、一音の語と、中と、下とに、ありて、
かくべし。ゐとかくべき、かぎりを いふなり。いと、かくべきハ、次に い
ふ。ひとかくべし
こゝろえおくべし。

ゐ

亥、猪、獣の名。和名抄(猪、井)亥、十二支の中の名。十二支の仮字ハ、亥の子の、こゝろ。猪ハ、ゐのしゝ、日本紀(偉能古)ゐの、あらしし。

井、田に ひく水を、たくはふる ところ。水を くみとる ところ。和名抄(井、為)

堰、ゐせき。堰、田に ひく水を、せき とゞむる ところ。和名抄(堰塘、為世木)みぞ、に、おなじ。

ゐ

ゐぐひ 堰杙、ゐせきの くひ。古事記(韋具比)。田舎、井中の ゐなかの か、こゝろ にて、井と、井との 間に ある、人家。和名抄(田舎、井奈加)。たなかゐ、田の井なり。いふなり。みなかみの、も、かく とも、の、例の ごとし。いさらゐ、小井、いさゝかなる、井。いたゐ、板井、板にて かこひたる、井。(かなづなゐ)桔槔、鐵索の 井なり。今の、つるべ。和名抄(桔槔、加奈豆奈為)

藺、草の名。和名抄(藺、為) おほゐ、莞 草の名。大きなる、藺。和名抄(莞、於保為)

(ゐざらひ)

ゐざる

躄、あしなへ。たゝざる時、あしを つく ところ。和名抄(躄、為佐良比)

膝行、ひざを つきて、行く。すわりながら、すりて 行く。此仮字、古書に、みえず。今ハ、古言梯に よりて、次の、ゐざりの、例に よれり。ゐざりハ、轅の 下に つけて すりて つかふ 道具なれバ なり。こゝろ。(ゐざり)乗底、田を ならす、道具。轅の、下に つけて、すりて つかふ。同じ。もの。和名抄(乗底、為佐利)

みすり

みや

みる

みる

蝟、虫の名。字鏡（蝟、為毛利）

禮、うやまひ。假字は、次の、みやびの例なり。（みやび）禮、うやまひ。續日本紀（為夜備）

みやまふ、禮、うやまふ。假字おなじ。

率、つれて行く。假字は、次の、ひきゐの例なり。ひきゐる、引率、ひきつれて、ゆく。字鏡（率、比支為天由久）

居、坐、をる。すわる。和名抄（居、為流）

ゐる、居、坐をり。

ゐへる、家居、家をれて、すまる。

をゝ、しゝ。かのゐる、鴨居、戸の、かみのまきみの上。くれゐる、黄昏、くれのまきみの上。

くらゐ。古事記（久毛韋）

くらゐる、位、坐を、位の坐として、をる、くらゐる。和名抄（位、久良為）

とのゐる、宿直、殿にあり、とのゐる。神門、鳥ゐる。和名抄（神門、鳥居）

まとゐる、圓居、まとゐにをる。車坐に、まとゐる、くるまゐる。神樂歌（万乃為）もとゐる、基本の、す

まゐる

あぢさゐる

あゐ

うなゐ

かくゐ

らゐ、假字おなじ。

參、青き、くゝる。神樂歌（万為利）

紫陽花、草の名。字鏡（紫陽花、安治佐為）

藍、草の名。和名抄（藍、阿為）

あゐ、紅、べになり。唐の藍の、くゝる。のおを、べになる、紅、べにばかり。唐の藍の、くゝる。のおを、べにとなる。和名抄（呉藍、久礼乃阿為）

萬葉集（久禮奈為）

髫髮、髮をうちまはれ、ちご。まげを、こ、童男童女、うなゐ。和名抄（髫髮、宇奈為）

ひとめくゝ、うなゐまろ、馬藍松、塚の上に、うゑて、すぎ、

うゑ、松、假字、おなじ。

かくゐ、乞兒、くひものを、ひこまち。

ふ、人。和名抄（乞兒、加多為）

（まほさゐ）　海の潮の、立ち騒ぐ、と。萬葉集（潮佐為）

ゐ　地震、大地の、うごき。日本紀（那為）

此ほかよ、用の字の語尾を、ゐ、なりとして、もちゐ、あちゐ、もちゐれ、とも、ゐらかす、説あり。されども、其假字のあかし、古書に見えず。今ハ、本居翁の、古事記傳によりて、ゐの説を、用ひず。但し、古事記傳に、よりてハ、其ゐをとらざるに、よれるなり。かなは用字の事ハ、日本辞典によれる。

い　此假字ハ、一音の語なる時、あるに、語の上に、ある時ハ、まぎれる。されど、二に、いくる如く、ゐと、かくべき、語、ゐ、なかきて其外のえ、みないなりと、覺ゆ。しかれども、中と下とに、ある時ハ、ゐと、ひとまぎれる。されど、こゝに、中と下とハ、ありて、いとかくべき限りとぞ、覺ゆ。かゝれども、みるひとかくべしとぞ、きこえ、ゐ。其外のえ、

（おいかけ）　綾、冠に、つけ、緒、和名抄（綾、於以加計）

さいづち　於槌、くゝ、ゐ、槌、和名抄（於槌、散伊都遲）

（のらづみ）　肉刺、音に、のられ、ぞ、和名抄（肉刺、乃以須美）

かい　擢、船の道具、和名抄（擢、加伊）

（かい）　蚊、虫の名、字鏡（蚊、加伊）

此ほかよ、猫、いとかくべきハ、也行の上二段、ずゐ、ゐ、ゆゐ、ゆゐれ、とも、ゐらくべき、ゐ、ゐ、ゐとの働きなり、ゐ、ゐ、其ゐ、ゐをぞよ、也行の上二段と、知る時ハ、いと、書くべきハ、自ら知らるべき、ゐとゐなれども、今ハ、ちがみに、其ゐ、

これらなども、次にいだせり。

悔ゆ　くやし　くい　のちのくい(後悔)のたぐひ。

報ゆ　むくゆ　むくい　かのむくい(應報)のたぐひ。

老ゆ　おゆ　おい　おいびと(老人)のたぐひ。

(う)

うの假字ハ、うめ(梅)、うを(魚)などの如く、語の上にある時ハ、まぎるゝことなく、すゑる(居)、すう(居)などの如く、中と、下とにある時ハ、ふと、ゆとにまぎるゝことあり。すゑるとも、すゆるとも、してハ、かく、されど、ここにあげ、中と、下とにありて、うとかくべき、かぎりをいだせり。ゆとかくべきハ、五にいだせり。其ほかのハ、みなふとかくべしと、辨ふべし。

(せう)

兄鷹、ちひさき鷹をいふ。但し小鷹の字の音にや。和名抄(兄鷹鶚字

此ほかに、猶うとかくべきハ、阿行、和行の下二段、うえうる、うれ、うゑうる、うれと、はたらくの働きと、音便となり。音便にて、うとかくべきハ、音便のところ十二にいだせり。其つぎことぞのハ、阿行、和行の下二段とぞに、知る時ハ、うと書くべきハ、自ら知らるべき、ことなれども、今ハ、ちなみに、其ことぞどもをも、次にいだせり。

得う　うる　うれ

飢う　ううる　ううれ

植う　ううる　ううれ

坐う　すうる　すうれ

ゆ

（蹴ゆ）　くゆる　くゆれ

ゆの假字ハ、ゆめ（夢）、ゆき（雪）などの如く、語の上にある時ハ、まぎるゝことなく、おゆる（老）、くゆ（悔）などの如く、中と、下とにある時ハ、ふと、うとに、まぎるゝことあり。おふるとも、ふとしてハかくべし。れども、中と、下とにありて、ゆと書くべきハ、也行の、上二段、下二段すなはち、ゆい ゆる ゆれ、ゆえ ゆる ゆれと、はたらくべき、又ここらの働きと、音便となれば、の八、其はたらきを、也行の、上二段、下二段とだに知る時ハ、ゆと書くべきハ、自ら知らるべき、ことなれども、なほ、ゆを上の、三とヒとの、末に出だせる、ゆと書けるもの、それなり。此うちにても、三の八、ことに、誤ることあり。まゝ音便にて、ゆと書くべきハ、下の、十三にいだせり。

ゑ

ゑの假字ハ、ゑ（餌）、ゑ（繪）などの如く一音の語なる時、あるひハ、ゑぐし（槐）、ゑにすだなどの如く、語の上にある時ハ、えにまぎれ、えとも、ゑとも書くべし。こゑ（聲）、すゑ（末）などの如く、下にある時ハ、中にありて、ゑとかく。えと、へとに紛るゝことあり。こえ、すへともしてハ、かくべき語ハなし。されど、ここにハ一音の語と、下にありて、ゑとかくべき限りとを出せり。えとかくべきハ、次にいだせれバ、其他のハ、皆へとかくべしと、辨ふべし。

ゑ

餌、魚鳥などを飼ふべき、くひものにあてゝある。和名抄（餌患）（ゑとり）屠児、餌をとるを、つぎとする人。和名抄（屠児、恵刀利）ゑぶくろ、餌袋、餌をいるゝ、ふくろ。

ゑ

繪、物の形を書きあらはしたるもの。呉音の、繪字の假字。ゑあはせ、繪合、繪をたたかはせたまぶれ。ゑがき、畫工、繪をよくする。ゑのこ、繪馬、神社にたてまつる、馬の繪の額。ゑのぐ、繪具、繪をいろどる、もの。

とも ゑ、鞆繪、鞆にかきたる繪。

ゑ

穢、けがれ、呉音の、穢字の假字。ゑど、穢土、浄土にむかへて、人世をいふる佛語。（ゑど）糞、くそ。

ゑぐし

酸、醢汁の、あぢはひ。和名抄（酸、惠久之）

（ゑにず）ゑんず ゑんどの 槐、木の名。字鏡（惠尓須）

（ゑぬ）

ゑふ

狗、獸の名。和名抄（狗、惠奴）

醉、酒の氣に、あてられる。古事記（惠比）

ゑぼし

烏帽子、頭にかぶるもの。呉音の、烏字の假字。

ゑむ

咲、ゑくぼ、靨、ゑむ時の頬のくぼみ。和名抄（靨、久之末）

ゑまひ、古事記（惠美）

ゑまし、ゑまひし、可咲、ゑむ、ゑむし。ゑむさまを見ゆ。假字、おもしろし。

（ゑづらか）笑ひあざけりるさま。靈異記（惠都良可）

（ゑらぐ）歡笑、ゑらひたのし む。續日本紀（惠良倭）

（ゑらる）ゑらぐに、おなじ。字鏡（嘲惠留）

ゑんず

ゑんぐ

ゑる

ゑ

すゑ

怨、うらむ、うらみをいふ。ふ怨の字音の假字。

蜻蛉、虫の名。和名抄（赤卒、阿加惠無婆）

雕、刀を、つきくみて、けづる。佛足石歌（惠利）

ゑぐる、刺、ゑりくる。假字おなじ。

聲、口よりいづる、音。すべて、物のひびき。萬葉集（許惠）

末、物のうら。ものの、すえ。古事記（須惠）

くずゑ、梢、木の末。和名抄（梢、古須惠）

（すゑ）

すゑ

ちゑ

つくゑ

つゑ

ゆゑ

假髪 髪の、おぎなひにそふる、かみのけ。和名抄（假髪、須恵）

陶 土焼の、うつは。假字ハ、次すゑもの、陶、土焼のうつは。和名抄（陶須恵毛乃）

智恵 心のさとり。心の、はたらき。呉音の、慧字の假字。

机 書籍などをのする、もの。和名抄（机、都久恵）ふづくゑ 机、ふみの机。假字おなじ。

杖 足のたすけにつく、もの。かせづゑ、横首杖、横木をつけたる杖。和名抄（杖、都恵）和名抄（横首杖、加勢都恵）

故 事のもとづくところ、その為、それによりての意。古事記（由恵）ゆゑゆゑしくゆゑあるげに見ゆ。ゆゑくし、ゆゑづきて見ゆ。假字おなじ

此ほかに、猶、ゑとかくべきハ、和行の下二段すゑたるすゑ、うゑ、くゑなど、いふべき言どもの働きなり。此ハ、其ことばを和行の下二段と知る時ハ、ゑと書くべきハ、自ら知らるべきことゝなりたれども、今ハ、ちなみに其ことばをも、次にいだせり。

饑う 腹にくひものなし。 うゑじに（饑死）のたぐひ。

植う 草木をうゑたつ。 うゑき（植木）のたぐひ。

据う すゑおく。 すゑしづゑ（柱）のたぐひ。

蹴う 足にてふみつける。 くゑまり（蹴鞠）のたぐひ。

ゑ この假字ハ一音の語なる時、語の上にある時ハ、ゑとかきける。されど四にいへる如く、ゑとかくべきものの

ばえおきて、其ほかのハ、皆えなりと、おぼゆべし。おほむね中と下とには、ある時ハ、ゑと「へ」とは、まぎるゝ。されど、これは中と下とには、ありてえとかくべきかぎりを、いへるなり。ゑとかくべきハ、六はいづれなり。其のほかのハ、みな、へとかくべしと、つぎつぎまなぶべし。

（あえか）　かよわくもの、かよわか、の意。中古の語にて、かく書きならへり。

すえる　饐、食ひもの、酸くなる。此假字、日本紀の訓によれり。されども、和名抄にも、酔類の注に冷酢を、比伊須由礼流とよみて、須由礼流を醶なれば、意にいへれば、饐ハ、すゆるにて、行きて、すえることも、すゆるともいへるなり。

（あとえ）　距、雞の、けづめ。和名抄（距、阿古江）

（さゝえ）　小筒、酒をいれて、簡東鍋に見ゆ、さゝえの、うつりしなるべし。

さゞえ　栄螺、貝の名。和名抄（栄螺子、佐左衣）

さすえ　樣、器のたぐひ。和名抄（樣、佐須衣）

ぬえ　鵺、鳥の名。和名抄（鵺、沼江）

はえ　鮠、魚の名。字鏡（鮠、波延）

ひえ　稗、草の名。和名抄（稗、比衣）ひえどり、鵯、鳥の名。稗をくふ鳥なればいふ。和名抄（鵯、比衣土里）

ふえ　笛、吹きならすもの。和名抄（笛、布江）のどぶえ、喉のど。和名抄（吭、乃無土布衣）

次のハ、ほかの語に結びあひたる、語なれど、結びをときて見れば、語義あらはれて、其假字も、知らるれども、今ハ、ひとつの、語のやうになりたるがあれば、いへるなり。

いりえ　入江、陸の方へ入りこみたる、江。

かもえ　鴨柄、今のかもゐのことにや。和名抄（鴨柄　加毛衣）

きのえ　甲、十干のうちの、きの木の兄、の意。十干は、木火土金水の、五行を、木の兄弟、火の兄弟と分ちて、二つづつにわけたるなり。

しづえ　下枝、下の枝。古事記（志豆延）

ながえ　轅、車の、前に出でたる、柄。長柄の、こころ。和名抄（轅、奈加衣）

ひこばえ　蘖、木の、きりかぶより生ゆる、もの。生のこころ。和名抄（蘖、比古波衣）

もえぎ　緑、草木の芽の、もえいでたる、色。萌黄の、こころ。

此ほかに、猶えとかくべきは、也行の下二段、すなはち、ゆえゆるゆれと、はたらくべき、ことばのえの働きなり。此は、其くしきをさぐるに、阿行、也行の、下二段と知る時は、和と書くべきは、自ら知らるべき、ことはりなれども、今は、ちなみに、其ちかく、用ふべきどもをば、次にいでたり。

肖ゆ　似る。

得　わがものにす。

覺ゆ　忘れずてあり。

聞ゆ　耳の心に知る。

越ゆ　經てゆく。

榮ゆ　盛りになる。

絶ゆ　つき、切る。

（あえ）　あえもの（肖物）の、たぐひ。

え　こころえ（心得）の、たぐひ。

おぼえ　ものおぼえ（物覺）の、たぐひ。

きこえ　よそのきこえ（外聞）の、たぐひ。

こえ　やまごえ（山越）の、たぐひ。

さかえ　くにのさかえ（國榮）の、たぐひ。

たえ　とだえ（跡絶）の、たぐひ。

費ゆ。少なくなる。つひえ（國費）の、たぐひ。
煮ゆ。煮るもの。にえ（沸湯）のたぐひ。
生ゆ。草木、おひいづ。もえ（蘖）のたぐひ。
映ゆ。光り、てりあふ。ゆふばえ（夕照）のたぐひ。
見ゆ。目の心よ、知る。みえ（見隱）のたぐひ。
燃ゆ。火、おこる。もえ（燼）のたぐひ。
萌ゆ。草木の芽、いづ。もえ（萌黄）のたぐひ。

を

この假字へを、などの如く、一音の語なる時或はをなどの如く、語の上よ、ある時へ、およ紛れ、おとも、あるいは、ふとも、ふと（間）をか、などの如く、中と、下とよ、ある時へ、書（竹の）あを、ひえ（青）、などの如く、中と、下とよ、ある時へ、しと頃とよ、紛るゝ、ありめつもゝ、ともあほと、ともふとしてハ書くべし。但し、國語よりてハ、中と下とよ、おと書くべき語なければ（ちもも）といふ、詰あれども、此ハ、乳母の義よりて、ひららの、語よりもあらず。母を、古言よりてハ、おとも、つゝ、中と、下とよりてハ唯、阿よのみ紛ふと、思ふべく、さて、てよ、をと書くべき、限りを出せば、おと、阿とハ、例の、推くして知るべし。

を

男、人のみならず。鳥獸草木よりも、通ずるを、男、を、此假字、次の、をのこ、をとこ、などの例よ、よる。をのこ、男、和名抄、夫、つまと、おとこ、男、を、ひと（男人）の、音便なり。和名抄、夫、乎乃古（男、乎乃古）

をとこ、夫男、つまと、おとこ、男、女よりむかへていふ時のこと。乎、宇止、和名抄、夫、乎止古（夫、乎、止）

をのこご、男、男子の、こ、の、児（こを、後夫の、ちの夫）

さつを、獵師、かりをする、男、夫、宇波乎（後撰集（佐都雄））

たけを、

を

壯士、たけきき男。萬葉集（安良志乎）

あらしを、壯士、あらくしき男。萬葉集（安良志乎）

たやりを、すくみこまむ。男。假字、ちなじ。

みやびを、風流士、みやびたる男。

ますらを、丈夫、きよしき男。萬葉集（萬須良乎）

を

牡鹿、をしかの鹿。さをしかとも。

じ。さは、つりこしたるこの鹿。さをしかとも。

緒、糸、索、紐、のたぐひすべてながくつづけるものをいふ。和名抄（絃、古止乃乎）

水脈、みづすぢの長くつづきたるをいふ。みをつくし、澪標、みをの、ちかひ。萬葉集（美乎）

舟のゆきとまる、みち。萬葉集（美乎）

くし、澪標、みをの、ちかひ。萬葉集（水乎都久志）

ちぐの、腰に帶する、紐。

つきとる、結ぶ。

を

苧、系、ようむ粉の、麻。和名抄（麻、乎）

る器。麻苧の意。和名抄（桶、乎計）

を

桶、麻をうみて入れる、器。水をくどを、入れ

を

尾、鳥獸の、ながい毛。和名抄（尾、乎）

を

岑、山の峰。信濃尾の、峰の穗。萬葉集（乎）

を

峰、山の峰。信濃尾の、峰の穗。萬葉集（乎）

を

峰、山の峰。長くひきそくる。とくとも、つく。

り。古今集（やまがつの、つがみよられぬ、まきの、を

がけ、みみれ、をもなたちかくして）

のく、岑上、をのうへのつ

まり。假字、ちなじ。

小、ちひさき物をいひ、まこと、唯、をぐろ、ま、小車、ちひさき

輝くそく、ていふ、しるし。をぐろ、ま、小車、ちひさき

車。をぐし、小櫛、ちひさきくし。

を

す、小簾、簾、ちひさきすだれ、まき、唯、簾をいふ。

を

唯、ただの例、聲、次の、を、唯、水紀の、古訓よりの聲。日

しく、警蹕の例なり。

実、ちなじ。

を

女、をみなの、音便。假字、をみなの、ちなじ。

みなと、なをらとみべし。をうなとも、をうなとも、ちなじ。

をみな（女、古事記（袁美那）をんな（女、をみなの音便。をんなめ、妻、妻めごとする、女。
をんなもあなし。をんなめ、妻（和名抄（妻、平無奈女））
岡、陸、低き山の、平かなる、ところ。和名抄（岳、平加）
可笑（をこがましく、みゆ。笑ひつべし。字鏡（可咲、阿奈乎加之）○此をかしを、おかしと、可怜と、怜
別ちたるく、用ふる人、あり。されども、おもしろき、怜
よりは、つづきをいふ、語なれば、をかしの、笑ひ
つづきは、ひらつよ、すべらかなる。されば、
本居翁の説は、ちがひて、ナリ。此假字、古書にみえず。
犯、おかす。今は、古言、掠の訛、ときこゆ。
をかつてし　茵芋、水の名。ひらつめ、鄰燭。和名抄（茵芋、平加豆也）
をがむ　拜、禮、をろがむ。假字は、次の、
をぐぎ　荻、草の名。和名抄（荻、乎木）

（をく　招、まねく。古事記（遠岐波）
（をぐなし　童男、男の、わらはなる。日本紀（烏奥奈）
（をけら　木、草の名。和名抄
をく
をこと　愚戯、たわむれ。古事部（袁許）
をこたる　怠、ものうし。病、いゆ。此假字、古書にみえず。
をごる　驕奢、たかぶる。古書にみえず。今は、字鏡集の、古訓にある。
語の、うつくしくなる、ときをいふ。此假字
をさ　長、かみなる人。和名抄（長、里長、里
長、をさ。むらをさ、邑長

匹のをさ。ふなをさ、船長、船のをさ。

篋機の、道具和名抄、篋、乎佐

譯語、外國の語を、こゝが國語に移し。こゝが國語を、外國の語に移す、人。日本紀の、古訓によりて。

鮫、魚の、帝コさ。和名抄（鄭、乎佐之）

幼稚、いとけなき。日本紀、不賢の、古訓によりて。をさなき、幼兒。なつき兒。

治納、靜ます。物を、入るべき所。こゝろ。萬葉集（平佐牟）をさまる、治、納、假字、同じ。

飾りまし、美しく、のこゝろ。萬葉集（平佐乎佐）

をさ

（**をさき**）

をぎし

をきなし

をくも

をきをき

をきをきし

をし

をゝ

をゝ

かゝ

本紀、軌制の、古訓によりて。

鴛鴦、鳥の名。和名抄（鴛鴦、乎之）

愛惜、まゝが。古事記（皇志）

をゝ

をき

をふ

（**をす**）

をそ

（**をゝ**）

をたけび

をち

をぢ

かゝ

葉、かめ。抄（韋、乎之加波）皮。和名

折敷、かゝ。けたゝ。をのゝ。折り敷きの、つゝ。

教、教の。紀、竟宴部（袁志弊）をしへ、教子、こゝが、をしへる人。

食、こゝ。古事記（袁須）（をしもの）食物、假字、ものゝ。

獺、獸の名。和名抄（獺、乎曽）

虛言、偽り。こゝ。萬葉集（乎曽）

雄詰、をゝ。日本紀（烏多鷄麁）たけび。

遠、とほし。とほき。とゝ。日本紀（烏智）をち、遠方、とゝ。遠近、あをち。こゝ。遠き方。をゝ。

こち

伯父、叔父、父の兄弟。和名抄（伯父、乎知）（えをぢ）伯父、父の兄。守鏡（阿伯、衣乎

地）（おとをぢ）叔父父の弟。字鏡（阿叔、弟乎地）おほをぢ、従祖父父の、をぢ。和名抄（従祖父、乎知）

老翁、年ある男の尊称。日本紀（老翁、烏賦）

懦弱、つたなし。足石歌（乎遅奈伎）始めは、もじぐる。萬葉集（乎知）をちかへる、をちて、かへる。假字同じ。

現在、うつゝ。集（乎都々）萬葉

一昨日、昨日の、昨日。萬葉集（乎登都日）をとゝし、一昨年、昨年の昨年。

少女、若きむすめ。古事記（遠登賣）

媒鳥、鳥をとる時、なかゞうちつかふ。和名抄（媒鳥、乎度利）

踊、とび、あがる。字鏡（踊、踊、乎止留）

斧、木をきる、刀。和名抄（斧、乎能）てをの、斬。木をきりぐる、斧。和名抄（斬、天乎乃）

戰慄、おそれふるふ。字鏡（慄、乎乃々久）

伯母、叔母、父の姉。父の妹。和名抄（伯母、乎波）

終、はてゝ。萬葉集（乎波里）

甥、兄弟の子。和名抄（甥、乎比）

女郎花、草の名。和名抄（女郎花、乎美那閇之）

叫、（現在）をらび、をらびとゝいふ、たぐ。詩語。

時節、節字の、古訓。日本紀。

檻、猛獸をこめおく、もの。詩大雅、牢字の古訓。

居、そこにある。萬葉集（乎流）

をる

折疊、かゞむ。かゞみてとる。まく波のうちをる、手折手をもて、折る。萬葉集（乎利）たをり山のたゝなはる、處。萬葉集（手折）

つゞらをり、九折、山坂のをれめぐれる、處。葛を折りて、のぼりくだりすといふ、意。

文選、九折の、古訓ヨリ

をろち

大蛇、大きなる、蛇。古事記（遠呂智）

をし

勇壯、をくしらし。日本紀、雄畧の、古訓ヨリ

（をゝる）

花の、さきみちて、たゝらくたゝもむをいふ。萬葉集（乎呼里）

（あをひえ）

竹刀、兒の、けぞのをを切る、竹のつゝ。和名抄（竹刀、阿乎比衣）

かゝをむし

蟻螻、虫の名。和名抄（蟻螻、加豆乎無之）

かをる

薫、かゝぐ。にほふ。字鏡（漢郁、加乎留）

こをぐい

紅梅、花の、あかき梅なり。紅梅の字音なり。紅ハ、くゝ。うたなるをなどゝ書くが、正しけれども、芭蕉も、をせ。

（さくらをかせ）

松蘿、苔の名。和名抄（松蘿佐流乎加世）

むらさに

紫苑、草の名。紫苑の、字音の假字。

むらをり

珠、道のむらをるべきすゝ。枝折のこと。

むらをる

菱撓、呵責、むらをる。萬葉集（之乎利）

たをやか

嬪、たをやめ。美女、たをやめ。和名抄（乎加世）

（ともをむ）

撓、たゞもむ。和名抄（乎加世）

ひをむし

蟶、虫の名。和名抄（蟶比乎無之）

まをす　まうす

申、貴き人に、告ぐ。古事記（麻袁須）此假字、音便にては、まうす。佛足石歌（麻宇佐牟）

やをら

徐々、しづかに。此假字、古書に見えず。今は、古言梯の、説によれり。

（つかさをき）

徘優、をかしき戯。猿樂のたぐひ。日本紀、徘優の、古訓によれり。

あを

青、藍の色。古事記（阿袁）あをむし、青、あをしとなる。字鏡（鮨艶、阿乎美）あをがひ、螺鈿、青貝の意。あをがへる、蝦蟇、虫の名。和名抄（青蝦蟇、阿乎加閑流）あをのり、陟釐、海苔の名。和名抄（陟釐、阿乎乃利）あをひくらぐさ、蛬虫、鳥比等。あをむし、蜈蚣、虫の名。和名抄（蜈蚣、阿乎無久佐）

（あを）

襖子、衣の名。假字は、次の、あをしの例によれり。襖子、和名抄（阿乎之）

いさを

功勲、いさをし、いさましくつよき。日本紀、竟宴歌（夷裝烏）

いさをし

勇、いさましく、をゝし。日本紀竟宴歌（伊佐良志久）

いを　うを

魚、水にすめる、鱗と鰭とある、いきもの。字鏡（魚、伊乎）古事記（宇袁）ひをひ、氷魚、魚の名。氷魚とは、ひをの、つゞまり。字鏡（鰷、乃比乎）さより、針魚、魚の名。和名抄（針魚、波利乎）かつを、堅魚、魚の名。かたうを、のつゞまりたる。和名抄（鰹、加豆乎）しらうを、白魚、魚の名。おほうみ（大海）を、おほみ、あをうめ（青梅）を、あをめといふ、なぐひの如し。いをのめ、肬、手足にいでくる、つぶらかなるかたまり。和名抄（肬、以乎乃女）魚目の、こゝろ。

さを

竿、長き竹。和名抄（竿、佐乎）からざを、連枷、稲をうつ、道具。唐竿のこゝろ。和名抄（連枷、加良佐乎）みざを、水竿、船をつかふ竿。水ざをの、こゝろ。

とを

十、数の名。古事記（登袁）

ばせを　芭蕉、草の名。芭蕉の字音なり。ばせをとをいの、ところをみるべし。

みさを　操、志を守るをいふ。靈異記(彌佐乎)

○濁音の仮字

じ　この仮字は、上中下の、いづれのくだりにても、ちよまぎる、さうなく、みな、じと書くべき、かぎりをいふなり。此かのは皆、ぢと書くべし、とさだまれるなり。

じ　不、うちけしの未来の語。ずの、くらゐきなり。

じ　痔、病の名。痔の、字音の仮字。

あじか　簣、土をいれて、にもつ…の和名抄(阿自賀)

あじろ　網代、網のへきなど、たらみ、つらね、うをとるのよくしもて、魚をとる道具。あみしろ(網代)の約

り鳥半日阿自

あまじし　膍肉、いのしゝの類、あまじしなしの約なり。和名抄、膂肉(阿萬之々)

いちじろし　著、かくれなし。仮字は、次の、いちじるし(著かくれなし)の例なり。萬葉集(伊知之路久)

かじく　憔悴、やせほそる。日本紀、憔悴の、古訓による。

(かじる)　呪詛、のろふ。日本紀、呪詛(伽辞離)

かたじけなし　忝、身のほどよ、すぎ、うるはしきを、もどかしがる。釈日本紀(可多自氣奈志)

くじか　麞、獣の名。和名抄(久之加)

くじく　折、をる、きずつく。字鏡(趾、久自久)

くじる　抉、ゑぐりみて、ねぢる。字鏡(剜、久自利意留)

さゞき

ちゞみ

ちゞむ

ちゞろく

（つゞむ）

ちゞる

なまゞひ

假庇、物見ちゞるの時、すだれ、かやうなる。次の、さゞきのうられちゝ。さゞ
ずき、假庇、さゞきは同じ。古事記（依受岐）

蜆、貝の名。和名抄（蜆貝之々美加比）

縮、短くなりて、ひしゝんとなる。假字、縮表字ハ、次の、ちゞまるの例なり。ちゞむ、縮表
ユおなじ。字鏡（縮志自万留）ちゞむ、縮ちゞむ
ユおなじ。（ちゞりき）

縅、ちゞみ、ちゝる、縅。和名抄（縅之々良岐）

辟易、たゞりて、動く。此假字、古書ユ見えず。今ハ、和訓ユよりて。

癒、それもの、それて高くなる。字鏡（癒阿平弥比志牟）

詰、ちゞめて、閉ふ。字鏡（詰奈是留）

懲、いゝくゝかゝてかゝりて。萬葉集（奈麻强）

ひゞろく

ひゞる

ちゞかみ

ちゞく

ちゞむ

ひゞき

ひゞり

ほゞゝ

呻、ちゝく。醫異記（呻、ちゝく、ちゝく夫）

蹶、ちゝる。字鏡（蹶不弥尔太留）

髭、ちゝかみ。和名抄（髭之加美）

ちゝく、長葉、水の名。和名抄（長水之加美）

彈、撓みのちゝる力。字鏡（彈撓みのちゝる力）

始、前ユおこる。續日本紀（波自米）

鹿尾菜、海草の名。和名抄（鹿尾菜、海草の名。和名抄（鹿尾菜、海草の名。次のひゞきも。ひゞきも鹿尾菜、海草の
菜、比須支毛）

聖、すぐれて、人。清みちゝ。
遇日本紀竟宴歌（比志理）

脯、肉の和
名抄（脯、保之々）

まじなふ　禁厭、祈りて、病をなほす類のことをいふ。小右記（万志奈比）（まじないの厭魅）とぐさをあらはす。字鏡（厭、万自物）（まじこる）まじこりたる。あしきみちなどいふ。祝詞式、麻自部利

まじり　眦、目のまじり。日本語のかたちはまじりふ。月の和、まじり、日の和、まじり、日語書

まじる　（まじりの、まじる和名抄）眼、目のまじり。萬葉集（未自留）

まじろく　交雜、いりまじりふ。ひらがふ。まじりたる交雜

みだれし　（まじりの、まじる和名抄）眼、目のまじり。萬葉集（未自留）

むだなし　（まじりの、まじる和名抄）眼、目のまじり。萬葉集（未自留）

めまじき　（まじりの、まじる和名抄）眼、目のまじり。萬葉集（未自留）

やまじり　（まじりの、まじる和名抄）眼、目のまじり。萬葉集（未自留）

あるまじ　（まじりの、まじる和名抄）眼、目のまじり。萬葉集（未自留）

いみじ　（まじりの、まじる和名抄）眼、目のまじり。萬葉集（未自留）

うまじ　（まじりの、まじる和名抄）眼、目のまじり。萬葉集（未自留）

うたがまじ　（まじりの、まじる和名抄）眼、目のまじり。萬葉集（未自留）

きまじ　（まじりの、まじる和名抄）眼、目のまじり。萬葉集（未自留）

くまじ　（まじりの、まじる和名抄）眼、目のまじり。萬葉集（未自留）

蕘蔚、草の名。和名抄（蕘蔚、草の名、和名抄）

鏃、箭の、ぢり。字鏡（鏃、也忘利）（鏃、箭の、ぢり、字鏡）

主人、家の、ぬし。古本風俗歌（阿流之）（主人、家の、ぬし）

饗、酒肴をもてなすこと。萬葉集（於奈之）（饗、酒肴をもてなすこと）

甚、はなはだ。假字、主人ぬし。古書ぬ見えず。（甚、はなはだ。假字、古書ぬ見えず）

蛆、虫の名。古事記（宇士）（蛆、虫の名。古事記（宇士））

項、頸の、うしろ。和名抄（項、宇奈之）（項、頸の、うしろ。和名抄（項、宇奈之））

同（おくし）萬葉集（於奈自）（同、おくし。萬葉集（於奈自））

雉子、鳥の名。和名抄（雉、支之）（雉子、鳥の名。和名抄（雉、支之））

籤、占のあるしるしの。五代帝王物語（孔子）（籤、占のあるしるしの。五代帝王物語（孔子））

きしじ

すきまじ

つじ

つむじ

つむじ

とじ

匙、ものを、すくふもの。此假字、古書に見えず。常に、かく書けり。

荒涼、さびし。すさびし。あらおそろし。此假字、古書に見えず、常に、かく書けり。

辻、道と道と、いであふ所。とろ、とろ。此假字、古書に見えず。されども、字鏡に、龍鱗を河辺の豆志牟とよみて、高くたかき、豆志なり。つじ、つじぎみ、いつくれむ、辻も豆志の、假字なるべし。

辻君、辻に立てもてる、遊女。つじうら、辻占、辻にしてする、占なり。

蹴蹋、水の名。假字にて、次の、例なり。いそつじ、羊蹴蹋、一種の、蹴蹋

和名抄（羊蹴蹋、伊波豆々之）

楓、風なり。まひかぜ。和名抄（楓、豆無之加世）

廻毛、牛馬の毛の、まろくめぐれる、なり。和名抄（廻毛、都保之）

刀自、ものをつかふ、ほめ。和名抄（貴度之）

いへとじ、家刀自、家の刀自。靈異記（家室、伊戸乃比之）

とじ、母刀自、母君。萬葉集（姑、刀自）

にじ（ぬじ）

虹、そらにたちて、五色の、輪のごとくなるもの。和名抄（虹、ぬじ、虹、ぬじ）

とじ

萬葉集（弩自）

櫨、水の名。假字にて、次の、例なり。ゆみ、弩弓、櫨にて、つくれる、弓。古事記（波士弓）

ひつじ

羊、獸の名。和名抄（羊、比豆之）未、十二支の、うちの、一つ。假字なり。

ふじ

富士、駿河國の山の名。和名抄（富士）

むらじ

連、姓の名。萬葉集（武良自）

もじ

文字、文字の、字音の假字

ず　この假字ハ、上中下の、ゐのびめなくいづくゐてもづ（以下略）
ぎるぎれど、こゝはハ、ずと書く　てきあぎりをいどゝり。此ハ
かのも、皆づと書くべ
しと、ゐきまふべし。

ず　不、うちけしの現在の、こゝにけし。

ずき　從者、とものびと。從者の、字音の假字。

（うずまる）　群集、むらがりあつまる。古事記（字愛須麻流）

すゞき　鱸、魚の名。古事記（須受岐）

すゞし　涼、あつさをさけしのぐ。萬葉集（須受之）　すゞむ　納涼、あつさを避く。假字、ありとし。

すゞめ　雀、鳥の名。和名抄（雀須々米）

すゞろ　漫、何となく。あのけからぬ。おほそらぬ。同語なれば假字も、ずゝろ。

たゝずむ　彷徨、たちやすらふ。たゝずむを略

たゝずらふ　佇、たちやすらふ。萬葉集（立伎）

ねずみ　鼠、獸の名。和名抄（鼠、禰須美）

うず　鏡、熊奈須良良不

かず　髻華、冠の、かざりもの。古事記（宇受）

きず　數、多きと、少きとをいふ語。萬葉集（加受）

くず　疵、物のつきたる、かきず。萬葉集（幾受）　傷、疵、つく。假字なり。

すゞ　葛、草の名。和名抄（葛、須加良良美）

すゞ　錫、金なり。一種の、金。續日本紀、白鑞の、古訓なり。

すゞむし　鈴虫、虫の名。すゞ振りてなる。古事記（須受）

鈴、ねの。假字なり。

ゑず
（ゑねず）
みゝず
もゝず

箜篌、箭の、弦を、くゝる。和名抄（箜篌波須。篌、由美波數）
唐棣花、木の名。萬葉集（波祢受）
蚯蚓、虫の名。和名抄（蚯蚓、美々須）
鵤、鳥の名。和名抄（鵤、毛受）

○音便の假字

音便とは、其音の、他の音より、みちびかれ、あらはれ、響かゝれたるとして、あらぬ音よ、きゝなるゝをいふ。漢語を平仮名、國語の假字、音便は、中昔のこと。

如く、呼ばれたるゝ、より、起りしなる、たゞひ、たゞへば、たゞひ、たゞへば、ずし、吐び、執念を、ちふねゝと呼ぶる、たゞひ、たゞへば、きゝゝひ（裾）の（きゝゝひ）ときゝえ、きゝをい。きゝゝゆる（くを、う）と聞く。たゞひをいふ。

（かゝゝゝ）鶏子の（かゝゝゝ）と聞く。

音便の假字は、いとゝうとなり。（旧し、今ゆゝゝゝゆしいふ。たゝへは、あり。十三こいふ。）

もゝの音は、きゝしなれども、音便よりては、皆いと書きもゝの音は、かくもひふへほまみむりゐをなれども、音便にては、皆うと書く、たゞひの如し。次の例を見て、思ひまとふべし。

い

きゝを、いと書く。（皇石）
きゝゝき、例。

きゝゝき（皇石）を、きゝゝい
きゝゝぎ（枝）を、さいぐゝ
きゝゝたま（墻玉）を、さいたま
きゝゝるむ（河貴）を、さいるむ
きゝゝひ（幸福）を、さいゝひ
きゝゝがき（透垣）を、すいがき
つきゝたち（朔）を、ついたち
つきゝて（衝立）を、ついたて

しをいと書く、例。

あした 朝を、あの方を
くし 串を、くい
ゐぐし 酸を、ゐぐい。
かを、うと書
くぐき、例。
かぶり 冠を、かうぶり
をうと書
くぐき、例。
かし 簡子を、かうし
さし 冊子を、さうし
ひらぐち 瓢箪を、ひらうづ
ゐぐし 酸を、ゐぐう。

おとうし 饗應を、おとうぢ。
わたくし 私を、わたくい。
熱寒遠近親疎
長短のたぐひ、皆おとうど。

ひやくし 柳子を、ひやうし
ぞく 族を、ぞう。
やうやく 漸を、やうやう
熱寒遠近親疎
長短のたぐひ、皆おとうど。

しを、うと書
くぐき、例
かだう 華堂を、かうだう
かはたけ 皮膚を、かうたけ
かはほり 蝙蝠を、かうぼり
ひを、うと書
くぐき、例。
あづまびと 東人を、あづまうど
いもびと 妹人を、いもうと
おとびと 弟人を、おとうと
かたびと 方人を、かたうど
ゐなかびと 田舍人を、ゐなかうど

くき 弟を、くうき
ふきがへ 髯を、ふいがう

こしまびと 島人を、こしまうど
せびと 兄人を、せうと
やまびと 仙人を、やまうど
まらびと 稚人を、まらうど

ふ をゝうと書 くべき 例。

ほうし 法師 を、ほうし

へ をゝうと書 くべき、例。

まくつきみ 枕 を、まくつきみ

ほ をゝうと書 くべき、例。

なほし 直衣 を、なほし

ま をゝうと書 くべき 例

たまそう 賜 を、たまそう

み をゝうと書 くべき、例

かみかき 髮掻 を、かみかき

さらふ 根 を、さらふ

つかへまつる 仕 を、つかへまつる

きほらひ 直食 を、きほらひ

こみち 小路 を、こみち

かみつけ 髮付 を、かみつけ

かみべ 神 を、かみべ

む をゝうと書 くべき、例

かもむかもぎ を、かもむかもぎ

かもし 酒子 を、かもし

り をゝうと書 くべき、例。

こうで 取 を、こうで

む をゝうと書 くべき、例

まおうぎ 扇 を、まおうぎ

を をゝうと書 くべき 例

こみづ 手水 を、こみづ

たをり 手折 を、たをり

ひむかは 向 を、ひむかは

おのをうす申をまうす

○長聲の音便

長聲の音便とハ、音を長くひきて、呼ぶなめり、いでくる聲をゆふ。さて、其響の假字まも、いろうこを用ふ。たとへバ、詩歌ハ、あかたうるを其志を、長くひきて、呼ぶハ、あいかあぬか、あひかの如く、響くまそ、まいかと書き、家司をけいし（四時）を、えのじり、ハハやかなるを、其やを、長くひきて、呼ぶハ、やうか、やあか、やをかの如く、響くまそ、やうかと書く。法官を、さうくわん（法官）を、ほうくわん（女官）を、ほうくうくわんなどの類、をうく（設）をまうく、ようり（夜）を、ようり、ほうり（反故）をほうりと書く、たぐひ。

ゆとりふ聲をそふるも、音便なり。

ゆとりふ聲をそふるもの、音便なり。

ゆとりふ聲をそふるもの、音便なり。

ゆとりふ聲をそふるもの

明治十九年三月三日印刷
明治十九年四月十二日發行
明治廿四年一月二日再版
明治廿八年八月十日三版

版權所有

著者　物集高見

印刷兼發行者　東京市神田區表神保町一番地　渡邊兵吉

發行所　東京市神田區表神保町一番地　六合館書店